

【草花の部屋】

イチゴ (バラ科オランダイチゴ属 *Fragaria ×ananassa*)

和名：イチゴ(苺) **別名**：オランダイチゴ(和蘭苺)、セイヨウイチゴ(西洋苺)

英名：Garden strawberry

バラ目 多年草 **原産地**：オランダ

花言葉：尊重と愛情、幸福な家庭、先見の明、あなたは私を喜ばせる

花色：白



← 写真-1 イチゴ

撮影日：2021年4月30日

撮影場所：大和郡山市郊外にて

撮影者：M さん



← 写真-2、3 イチゴの花

撮影日：2021年3月20日

撮影場所：大和郡山市郊外にて

撮影者：M さん





← 写真-4 イチゴの果実

撮影日：2021年4月30日

撮影場所：大和郡山市郊外にて

撮影者：M さん

大和郡山市郊外の家庭菜園で見かけました。

真っ赤に熟したイチゴのとろけるような甘さは自家栽培ならではの味わいです。家庭菜園に欠かせない果物で、最近は種類もふえ、甘く大きく、栽培しやすい品種が豊富になりました。

イチゴは毎年春に花を咲かせ、実をつける多年草で、生育適温が 17～20℃と冷涼な気候を好みます。夏の暑さにはやや弱いものの、寒さには強く、雪の下でも十分冬越しします。ビタミン C が豊富で、抗酸化物質として知られるポリフェノールの一種であるアントシアニンや抗癌作用のあるエラグ酸が含まれており、生食の他、ジャムに加工されることも多い植物です。

イチゴの実と思って食べている部分は、花托(かたく)又は花床(かしょう)と言われる花の付け根の部分が発達して食用部となったものです。イチゴの本当の実の部分は一見して種子に見える一粒一粒の瘦果(そうか)部分です。ちなみに、イチゴを縦に切って、断面図を見るとこの瘦果部分に水分や栄養を送っている筋が見えます。この瘦果部分に種があります。また、軸に近い部分より先端の方が、また果肉の中心よりも表面の方が甘いそうです。

イチゴは、親株からランナーを伸ばし、子株、孫株と株を増やします。この親株から伸びたランナーの向きと反対方向にイチゴの花房が出るので、ランナーを北側に向けて植え付けると、花や実に光を当てることができます。

通常、可食部の表は赤色(アントシアニンによる)ですが、現在では栃木県いちご研究所が開発した「ミルキーベリー」と呼ばれる白色の品種もあります。

北半球では古くから各地で野生イチゴの採集と利用が行われていたそうでスイスのトゥワン遺跡で出土した紀元前 3830 年から 3760 年頃の穀物のスープからはイチゴの瘦果が発見されているそうです。このころ、古代ローマでは既にイチゴの栽培が行われていたそうです。

近代栽培イチゴであるオランダイチゴは、18 世紀にオランダの農園で、北米原産のバージニアイチゴ(*F. virginiana*)とチリ原産のチリイチゴ(*F. chiloensis*)の交雑によって作られたそうです。

日本には江戸時代にオランダ人によってもたらされたそうですが、本格的に栽培されたのは 1872 年からだそうです。イチゴ栽培が一つの産業として行われるようになったのはさらに遅く、第二次世界大戦後少し経ってからだそうです。

<ちょっと一言>

*漢字には「莓」と「莓」がありますが、これらは異字体で「莓」が本字ですが、辞典によっては「莓」が見出しになっていて、「莓」は本字としていることもあるそうです。現代日本では「莓」を使い、現代中国では「莓」を通常使うそうです。

*バージニアイチゴ：

・探検家や植民者によって 16 世紀前半から 18 世紀半ばにかけてヨーロッパへ持ち込まれた種で、植物園を通じてヨーロッパ各地に普及したそうです。

*チリイチゴ：

・マプチェ族などの先住民によって長年栽培されてきた品種で、18 世紀初頭から 19 世紀半ばにかけてヨーロッパへ持ち込まれた種で、こちらも植物園を通じてヨーロッパ各地に普及したそうです。

*瘦果(そうか)：

・小さな乾いた果実で、果皮は硬くて裂開せず、中に 1 種子をもっているもので、このような実のつき方をする植物にはキンポウゲ、ソバ、タンポポなどがあります。